

INDEX

- p1 ピンクリボン岡山2017の活動
- p2 第8回岡山 MUSCAT フォーラム『育メン・育ボス・育自』に参加して
- p4 平成29年度日本医師会女性医師支援センター事業中国四国ブロック会議に参加して
- p5 第6回西予市おイネ賞事業表彰式
日本医師会 女性医師支援シンポジウム〜もっと素敵な西予市へ〜に参加して
- p7 山陽女子ロードレース救護班に参加して
- p8 女性医学生・医師のキャリアとライフプランに関する座談会
- p10 シリーズ女性医師支援 女性医師支援 当院での取り組み[川崎医科大学総合医療センター]
- p12 女性の健康週間 県民公開講座「認知症を知ろう」のお知らせ

ピンクリボン岡山2017の活動

岡山済生会総合病院 / 岡山県女医部会副部長 渡邊 恭子

ピンクリボン運動とは、乳がんで亡くなったアメリカの患者の家族が「このような悲劇が繰り返されないように」との願いを込めて作ったりボンからスタートし、1980年代から行政・企業・市民団体による乳がんの早期発見を啓発するためのイベントが広く行われています。

日本では10月がピンクリボン月間とされ、「ピンクリボン岡山」では岡大乳腺内分泌外科の土井原博義教授を中心に、岡山県、岡山市、岡山県医師会、看護協会、放射線技師会、健康づくり財団、患者会等の協賛にて毎年、自治体の懸垂幕、病院のポスター、駅前のターミナルスクエアビルのピンクリボン、チャリティーコンサート等をし



ています。

2017年は山陽新聞社の共催を得て、10月14日(土)午前中に小雨の降る中、約100人がさん太広場から市内約3kmのウォークラリーをし、参加者にはオリジナルタオルを進呈しました。またさん太広場では、健康づくり財団のマンモグラフィー車による無料検診や各出店もされ、午後からはさん太ホールで平成人准教授の「乳がんの一次予防ライフスタイルや遺伝、乳がんの話題」の講演とヨガ体操では、松本久美子氏の「簡単ヨガライフのススメ」、岩本高行助教の「乳がんの二次予防・もう一度乳がん検診を考えよう」の講演があり、140名が参加されました。



乳がんは女性にとって最もかかりやすいがんであり4代になると増加し始めますが、女性の11人に1人になるとされ、年間8万人が乳がんにかかり2015年では13000人が乳がんで死亡された（70人に1人）と報告されています。また検診年齢でない若年者でもおこり、遺伝性の乳がんでは、その70%が「BRCA1・BRCA2」の遺伝子が関係し、70歳までに約70%の人が乳がんを発症し、

20～40%の人が卵巣がんも発症すると報告され、対象となる若年者の早期受診も大切です。

5年生存率は2期までであれば90%以上、3期で80%、4期で50%で早期発見が重要であり、正しい知識の普及と乳がん検診の推進のために「ピンクリボン岡山」の活動へのご協力を今後ともよろしくお願いいたします。



第8回岡山MUSCATフォーラム 『育メン・育ボス・育自』に参加して

セントラル・クリニック伊島／岡山県医師会女医部会委員 金重 恵美子

2017・11・3地域医療人育成センターおかやま(MUSCAT CUBE) MUSCATホールにて開催。

I 基調講演：『国における女性医師支援の取組』
櫻本恭司先生（厚生労働省 医政局医事課 医師臨床研修推進室 医師臨床研修専門官）

日本では全医師に占める女性医師の割合は20.4%だが、若年層では増えており、医学部入学者の約3分の1。世界では、40%を超えている国も多い。日本でも診療科によっては女性医師が多く、皮膚科では46% 眼科、麻酔科も38%に近い。産婦人科も30代は59%、20代は68%と女性医師が増えている。女性医師は出産、子育てで休職、離職することが多く、子育てと勤務を両立させるため「女性医師就労支援事業」「女性医師キャリア支援モデル普及推進事業」「女性医師支援センター

事業」などが行われている。

II 特別講演：『男性も女性も輝けるワークライフバランス～キャリアを続ける方法～』

石蔵文信先生（大阪大学人間科学研究科 未来共創センター 招へい教授）

略歴：1955年京都生まれ。専門は循環器内科だが、心療内科の領域も手がけ、特に中高年のメンタルケア、うつ病治療に積極的に取り組み「男性更年期外来」を大阪で開設、性機能障害の治療も専門的に行う。最近は、夫の言動への不平や不満がストレスとなって妻の体に不調が生じる状態を「夫源病」と命名し、話題を呼ぶ。また60歳を過ぎて初めて包丁を持つ男性のための「男のええ加減料理」を提唱。

「妻の病気の9割は夫がつくる」「なぜ妻は、夫

のやることなすこと気に食わないのか エイリアン妻と共生するための15の戦略」など著書多数。

ユニークな発想で、一番時間の都合がつくご自身が大学を退職し、女医の妻と3人の女医の娘のサポートをしている。ご自身の経験より、キャリアを中断せずに子育てをするコツを楽しく伝授。父親の育児参加、家事参加が求められているが、本来男性は育児に向いていないので、主たる育児は母親に任せて、父親は家事に専念し、家事を担うことで女性の負担がぐっと減る。男性は一人で3時間は子守ができるように。離乳食から、親とシッターさんの利用法まで、子供は急な病気やアクシデントも起こすので、気持ちの余裕をもってヘルプを頼める状況を作っておく。現在、孫育てに貢献中。孫を遊んでやっているのではなく遊んでもらっている。育ジイは認知症予防や妻に感謝できることで夫婦円満にもつながる。高齢者も参加して地域全体で子育てをするという意識の転換を促すために、孫の保育園の送り迎えや保育園園芸サポーターをし、自ら「男のための料理教室」を主催し、これから高齢者の生き方「育ジイ道」を実践している。

III パネルディスカッション：「育メン・育ボス・育自」

● 神崎寛子先生（公益社団法人 岡山県医師会理事）

2012年岡山県医師会の行った「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査を紹介。職場での意識は変わりつつあるが、家庭ではまだまだ女性の負担が大きい。家事育児を男性は手伝うのではなく分担してほしい。また女性医師は自分のキャリアをどのように形成していくか、結婚子育ての始まる前から考えておくことも大切。早めに結婚、子育てをする。仕事を休むのは短く。手伝ってくれる人を見つける。社会的サポートを利用。女性医師支援を受けながら、キャリアを継続することこそが、見守ってくれた社会への恩返しです。

● 岡田あゆみ先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 小児医科学 准教授）

現在小児科学教室39名中14名女性（36%）、マスカット支援枠5名。小児科医にとり子育ては貴重な経験であり良い研修になる。子供を育てながら親も育つ。キャリア支援について、ともに悩み相談する過程でボスも育つ。過保護過干渉にならないように注意しながら、相手の価値観を尊重し、活躍の場を探し、責任は一緒に負うことで、「育ボス」している。

● 池田宏国先生（岡山大学病院 乳腺・内分泌外科 助教）

バリバリ仕事中心の外科医が、小児科医の妻のキャリア支援と、実母の介護問題、3人の子育てという試練にどう解決の道を付けていったか。まさに育ボスへの道を報告。女性を支える男性側へのサポートとして、女性医師を妻に持つ男性医師の会を作ってアドバイスされている。また、実母の「女性は欲張り、できる能力があるなら、家庭も仕事も子育てもすべてやらせてあげなさい」というコメントを紹介。理解のある家族特に夫側の家族の理解が女性のキャリア継続に重要であると感じた。

● 小川千加子先生（岡山大学病院 産科婦人科医員（キャリア支援枠））

産婦人科の女性医師支援状況を説明。自身のキャリアパスと、キャリアを継続するための工夫を紹介。サポート資源は有効に使い、一人で頑張りすぎない、自分でしかできない仕事に集中し、外部委託できるものはして時間はお金で買う。好きな仕事をして、夜はさっさと寝る！…

頑張ってきた女医さんに共通のノウハウが詰まっているように感じた。そして同じ産婦人科の後輩の頑張り、ほのぼのと胸が熱くなった。

県内外の男女共同参画関連団体の皆様、指導立場の医師、育児中の女性医師、教職員、行政職など様々な方が参加されており、フロアとの意見交換も活発に行われました。それぞれの立場で参考になることが多かったと思います。

平成29年度日本医師会女性医師支援センター事業 中国四国ブロック会議に参加して

大野眼科／岡山県医師会女医部会委員 大野 広子

平成29年11月4日、岡山コンベンションセンターにて日本医師会女性医師支援センター事業中国四国ブロック会議が開催されました。今回は徳島県医師会の担当で、日本医師会から7名、中四国各地から35名参加しました。岡山県医師会からは、神崎寛子理事、坂口紀子女医部会部会長、渡邊恭子女医部会副部会長、松香陽子女医部会委員、新津純子女医部会委員と私が参加しました。

まず日本医師会女性医師支援センター事業について、日本医師会常任理事の今村定臣氏より女性医師バンク事業を中心とした事業の報告がありました。新規求職者は増加しており、平成29年9月末現在71名で、そのうち61名が就業成立しているそうです。女性医師バンクをもっと広く知ってもらうために、学会でのブース展示、医療系雑誌などへの女性医師支援に関する記事の掲載、Facebook（SNS）を使った広報活動の強化、女性医師バンクHPに都道府県医師会専用ページをオープンして都道府県医師会との連携を強化する、などの取り組みを行っているとのことでした。次に日本医師会男女共同参画委員会副委員長

の鹿島直子氏より、病院勤務の女性医師を対象に全病院に調査票を配布し、無記名で郵送回収を行った結果の報告がありました。実施期間は2017年2月～3月で有効回答者数は10,373人（病院勤務女性医師数の25%）でした。1週間の実働勤務時間が60時間を超えるのは全体では25%で、外科、脳神経外科、救急科についてみると50%以上が60時間を超えるそうです。女性医師の悩みとして最も多いのは家庭・育児に関するものですが、医師としての悩みもほぼ同率あるとのことで、出産育児のみならず、医師業務との両立やキャリア形成確保のための支援も重要である、とのことでした。

次に徳島県医師会男女共同参画委員の猪本康代氏より、「医師会員の係る介護問題への県医師会の取り組み」について報告がありました。昨年の中国四国ブロック会議後に会員に対する介護に関する事業を実施した県は2県、必要性を感じた県は7県（実施した2県を含む）でした。介護に関しても女性医師の負担が大きく、何らかの支援策は必要であるが個々の事情が異なるので画一的な事業は展開しにくい、とのことでした。

山口県では、女性医師支援のホームページで介護に関する基礎知識や介護サービス提供事業所の検索サイトなどの紹介をしているそうです。

続いて、各県の女性医師支援活動の取り組みについて報告がありました。どの県も復職支援システムが確立され、女性医師のキャリア支



援、育児支援は充実してきました。岡山県からは、女性医師相談窓口事業、医師の勤務環境改善事業、Doctor's Career Café in OKAYAMAを柱として、事業を展開しています。また、勤務医部会と合同で開催した医師の勤務環境改善ワークショップは今年2回目で、多数の参加者がありました。岡山県は他県と比べても、女性医師支援活動が活発に行われていると感じました。また、他の県でも独自の取り組みがなされていました。高知県では医師会が婚活のための情報交換会を行い、各基幹病院から独身のドクターに参加してもらっているそうです。これはとてもユニークな取り組みだと思いました。徳島県では育児と介護に関するアンケートを実施し、介護休暇が取れず離職に追い込まれた現実が見えたそうです。そこで、介護と仕事の両立に関する講演会や、開業医向けの介護講習会、医学生・研修医・男女共同参画委員を交えての座談会を開催するなど熱心に取り組まれています。



最後に徳島県医師会男女共同参画委員会副委員長の坂東智子氏より日本医師会へ、「介護についての支援活動がもっとできるように対応してほしい」という要望が出されました。

今回初めて参加して、女性医師支援について各県でいろいろな方法で真剣に取り組んでいることがわかりました。子育てと仕事の両立支援は充実してきていますが、介護と仕事の両立支援はまだ足りていないと感じました。介護の問題は男女を問わず誰もが直面する問題です。介護と仕事の両立の負担が少しでも軽くなるような支援制度の充実が望まれると思いました。

第6回西予市お伊ネ賞事業表彰式

日本医師会 女性医師支援シンポジウム～もっと素敵な西予市へ～に参加して

平島クリニック/岡山県医師会女医部会委員 吉岡 敏子

平成29年11月26日(日)愛媛県西予市宇和文化会館 大ホールで開催。

第1部 西予市お伊ネ賞事業表彰式

主催者挨拶、受賞者発表、審査機関紹介、審査総評、祝辞及び来賓紹介。女性の代読者が多く、配慮を感じました。

受賞者挨拶
「全国奨励賞」朝日生命成人病研究所治験部長

大西由希子氏
糖尿病専門医として臨床や研究に携わる一方、2009年に子育てコミュニティー「ママドクターの会」を設立。男性も含め全医師が患者のため活躍できるよう



図1 会場入口 雨模様でした。



図2 受賞者の3名。左から大西先生、藤山先生、中川氏



図3 地域奨励賞の藤山先生と

に考えている。
 「地域奨励賞」愛媛大学医学部皮膚科学 准教授 藤山幹子氏（お馴染みの皮膚科の先生でビックリ）
 大学の女性医師部会長。院内の復職支援コースや託児所・相談サロン「マドン

ナサロン」設置推進。女性医師の自己評価が意外に低い点が気になるが今後も女性医師が働きやすい環境整備予定。

「医学生奨励賞」愛媛大学医学部医学科 5回生 中川友香梨氏

診療活動サークルの取り組み等について話した。

第2部 日本医師会 女性医師支援シンポジウム ～もっと素敵なお西予市へ～ 基調講演

1. 海原純子先生 日本医科大学特任教授 心療内科医

健康寿命と輝き思考 ～素敵に歳を重ねよう～
 ストレスを乗り越え健康貯金をキープする事。自分の才能を見つけ大変だけど努力する事がイヤではない事が大事。

2. 自見はなこ先生 参議院議員 東海大学医学部医学科客員准教授・医師

女性医療職の輝く明日へ～地域の健康をめざして～ 国民皆保険の歴史と意義

日本では1961年から国民皆保険で医療の質を確保。欧州では保育園の園長は看護師有資格者が多いなどのお話。

西予市の一般の方も多数参加し大ホールが満員で活気あふれる会でした。

私は松山市内に前泊し当日朝、早起きして道後温泉本館ではなく9月に新装開館したばかりの



図4 道後温泉本館 日本最古の温泉(銭湯)

飛鳥乃湯泉に行って来ました。中庭はまだ工事中でしたが温泉につかったあと、二階大広間で可愛い椿のお饅頭とお茶を頂きほっこりしました。道後温泉はアルカリ性単純温泉の美肌の湯です。



図5 中庭が工事中の飛鳥乃湯泉 外観



図6 お茶菓子 椿は松山市の花



山陽女子ロードレース救護班に参加して

医療法人こしむね瀬戸クリニック／岡山県医師会女医部会委員 越宗 あさこ

雲一つない快晴でした。平成29年12月23日。朝早い集合でしたが、登録を終えて既にアップしている選手達の熱気に包まれたシティライトスタジアム。まずは自分も受付をしてスタッフパスをいただき、医師会女医部会と書かれたテントへ。昨年も参加していたとおっしゃる坂口先生のご指導のもと、おぼつかない手つきでテント前にのぼりを設置。机に女性の病気に関する冊子を並べたり、当日配布するティッシュ入りがん検診啓発チ



ラシを用意したりしているうちに号砲です。県警の音楽隊の演奏に送られて颯爽と走り去る有森裕子杯ハーフマラソンの出場選手達。グラウンドを1周すると公園内のコースを走るんですね。それも知らなかったで、皆さんが動くのに合わせて移動して沿道で応援。30分遅れで人見絹枝杯10kmの選手のスタートもあり、あちこちに移動しながら位置取りも大変です。選手達が市内コースに出たのでしばらくスタジアム周辺にいる人たちに先ほど用意したチラシを配って歩きました。さすがにトップランナーが集まっている大会で応援も熱いものでしたが、



そんな大会に市民ランナーとして参加された方々にもたくさんの歓声が上がっていました。プログラムを見ながら多くの人の手による素晴らしい大会だなあと改めて感心した次第です。最後の表彰式では、入賞した市民ランナーに賞品を渡すお手伝いことができました。走り終わった選手が腰痛を訴えて医務要請がありましたが、居合わせた整形外科の先生が対応してくださり助かりました。今回の経験を通して、啓蒙活動の大切さと社会貢献について深く考える良い機会をいただきました。今後も診療室にこもってばかりいないで、対外的に自分のできることを広げていこうと思います。



女性医学生・医師のキャリアとライフプランに関する座談会

司 会：渡辺病院 溝尾 妙子

出席者：安部 優子 岡山大学病院乳腺外科医師 7年目

竹居 セラ 岡山大学病院初期研修医 1年目

川口満理奈 岡山大学病院初期研修医 1年目

中村 薫 岡山大学医学部 4年生

木股 由貴 岡山大学医学部 4年生



前列左より 中村、安部、溝尾 後列左より 木股、竹居、川口

どういうキャリアを積みたいか？

溝尾 本日は、女性医学生、女性医師ならではの悩みや意見をぜひ聞かせていただければと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。まずは学生の中村さん、木股さんにお聞きします。どのような専門に進みたいと考えていますか？

木股 内科か外科かどちらかと言えば、外科に興味があります。専門を深く掘り下げたいとは思っていますが、進路はまだこれからです。

中村 私もはっきりとは決めていませんが、興味があるのは外科です。進路もそうですが、初期研修先の病院を選ぶにも何を基準にすればいいのかよくわかりません。

溝尾 研修医の竹居先生、川口先生はいかがですか？

川口 将来的には小児科に行きたいと思っています。患者さんの背景や社会的なところまで関われる仕事がしたいからです。ただ、3年目から小児科のプログラムに入るのか、別の病院で大人も含めて経験を積んでからにするのか。また、初期研修後の研修先病院がどこになるのか、専門医を取ってから常勤で週3日以上働かないとダメだとかいろいろあるので、様子を見ながらいろいろな先生方の話を聞いているところです。

竹居 私は泌尿器科を希望しています。オペ室にも入れ、いずれは内科的な診療もできるからです。岡大病院では腫瘍や感染、トランスジェンダーなどの内分泌分野もあり、内科的なジャンルを幅広く扱っているので選択肢もたくさんあります。腫瘍学も含

め多方面に深いところに魅力を感じています。ただ、研究や留学をしてみたい気持ちもあります。専門医制度が新しくなった時に、それを早い段階で行った場合、専門医取得まではどういう障害が出てしまうのか、まだ情報を集めることができていません。そもそも、その科でいいのか答えを出し切れていないところもあって悩み中です。

中村 大学院に行く時期はいつが多いですか？

竹居 1年目から大学院生として研究も研修医もしている人もいます。

川口 外科の場合、専門医を取った次のステップとして大学院へという人が多いイメージはあります。私もどこかで研究はしたいと思っていますが、専門医を取ってからいろいろな時期があり、しかも専門医が基本領域とサブスペシャリティの2段階になって、2段階の部分と大学院との兼ね合いで一緒にできるのか、後に取りたくないといけないのか。後になったら10年目以降ですから、どうなるのかなと思います。

竹居 2段階に行く間に踊り場みたいなのところがあるのか、とかね。

川口 2段階に行く前に大学院に入ることができるのか。まだ誰も出ていないから不安です。

溝尾 専門医制度が初めてなので不透明な部分がありますが、各科各プログラムで考えられているようですね。

キャリアとライフプランのバランス

溝尾 学生の皆さんは、専門を決める時にライフプランのことは意識しますか？

木股 まったく想像ができません。ポリクリを回り始めたら、いろいろな先生にお会いして具体的にになっていくと思います。女性医師の一般的な印象として、仕事とライフイベントの両立はとても難しいのではと感じています。

中村 私は自分が医師として使い物になることがまず大事で、自分がやりたいことを優先したいです。結婚や出産は、特に外科ならある程度独り立ちできるようにしてからじゃないと難しいのかなと思います。

溝尾 研修医の先生は、専門を決める時にライフプランは意識しましたか？

川口 考えてはいますが、いろいろ話を聞くと結局どこに行ってもあまり変わりはないのかなと思っています。

竹居 泌尿器科の女性の先生に話を聞くと、内科メインの泌尿器疾患を診るなら自分で時間を決めやすく、働く時間は長いけどプライベートもしっかり保てると。私は外科系の手術も内科も勉強したいので悩み中です。ライフイベントのことを考えて、余裕のあるキャリアを考えておくのがいいのかなと思います。

安部 私は6年目に外科専門医を取ってから出産しました。そこまでは計画通りでしたが、子どもが保育園に入れず、ほぼ一年間待機児童に。ですから今から考えなくても、その場ごとで立ち止まって、納得のいく結果を出せたらいいのではないのでしょうか。

木股 例えば、研修医の時に結婚や出産をしておけばラクですか？

安部 出産した後で専門医を取ることもできますが、復帰する時に、履歴書に専門医と書けると自信が持てます。今後、専門医制度が二段階になるのなら一段階取っておくと心に余裕ができるのでは。専門医は早めに、最短がいいと思いますね。

川口 出産したばかりの先生と話す機会があった

のですが、安部先生のように保育園を探すのがまず大変だと。それに専門医を取っている先生なので、ある一定以上休んでいると一から取り直しになってしまう。自分もそういう状況になるのかと考えると不安です。

安部 本当に岡山は保育園が足りないですね。私は大学病院を一旦辞めて、東京の病院で勤務して出産後に帰ってきたので、辞めた病院と復帰する病院が違っていたので育休にはならなかったんです。保育園に入るための点数でボーナス点がもらえず不利に感じました。医師としてずっと働いている以上、育休明けとして換算してほしい。団体として陳情書を出すなどの働きかけをしていただけたらと思います。

溝尾 その他に、どんな支援があったらいいと思いますか？

木股 もし将来自分が出産する機会があったとして、産休や復職、新しい病院を探すなどタイミングごとに違うと思いますが、相談できる場所があればいいと思います。

竹居 男性が育児に参加することに対して、ちょっと職場環境が冷たいような感じがします。男性医師や看護師との相互理解の場があればいいと思います。

川口 上の世代で頑張ってきた女性医師からアドバイスがいただきたいです。

木股 私もそういうアドバイスをいただきたいです。将来どうなるだろうって、学生みんな不安に思っているので交流の機会があれば、みんな参加すると思います。

中村 ゆっくり時間を取って、ライフイベントや仕事の両立に関して先生方と話ができる機会があると思います。学生は情報がないので、キャリアセンターのこうした会や講演会の情報はありがたいです。

川口 学生の時に悩んでいたことを今も悩んでいる人が多いので、交流しやすい状況や研修医もネットワークがあればいいですね。

溝尾 医学生、研修医のネットワークがあれば、こちら側もお手伝いもしやすいですね。ぜひ実現させたいと思います。本日は皆様、どうもありがとうございました。

女性医師支援 当院での取り組み

川崎医科大学総合医療センター 病院長 猶本 良夫 先生



当院は初代川崎祐宣院長が昭和13年に外科昭和医院を開設して以来、24時間体制で救急医療を中心に、岡山市の中心部で地域に密着した医療を提供してまいりました。平成23年4月に学校法人川崎学園が事業承継して川崎医科大学の第二の附属病院として再スタートし、平成28年12月に新病院を開院いたしました。

新病院でも、「医療は患者のためにある」という理念のもと、医科大学の附属病院として最新の設備と医療機器を備えた最先端の高度医療を提供し、地域に密着した地域から信頼される病院を目指しています。また、医師や看護師等のメディカルスタッフを志す学生の臨床実習を積極的に受け入れて将来の良き医療人を育成することで、医療と教育の分野で地域に貢献してまいります。

川崎学園では、全職員を対象として、次世代育成支援対策推進法に基づく行動計画の中で、先ず平成17年8月に第1次事業計画を4年計画で策定しました。平成19年4月には、配偶者出産休暇（1日）を新設し、職場復帰し易い環境整備のために育児休業期間中の代替要員確保と派遣職員の採用を開始し、所定労働削減のために変形労働時間によるノー残業体制を整備しました。平成21年8月からの第2次事業計画以降は3年

計画とし、仕事と家庭の両立実現に向けてWLB（work life balance）ワーキングを立ち上げ、平成21年4月に職場復帰支援センターを開設し、子の看護休暇の拡大・介護特別有給休暇の新設・事業所内保育所の定員増・移転検討を行い、平成23年5月には倉敷市の川崎医科大学附属病院内に病児保育室を開室（定員5人）しています。当院にも平成23年4月に院内保育所を開設（定員10人）しました。平成24年8月からの第3次事業計画では、子育てを行う労働者等の職業生活と家庭生活の両方を支援するための雇用環境の整備として、先ず各種会合・会議等で繰り返し意識啓発を図り、職員間の相互理解を深め、同月開設した「臨床教育研修センター」では「職場復帰・職場体験プログラム」を開始しました。同年10月に「子育て支援センター」を設置して相談・情報提供を行い、平成25年1月には同センターのホームページも開設し、広く職員に活用されています。併せて、病児保育室の収容人員も拡充しました。また、第2次事業計画の際に発足したWLBワーキングの提案で、WLB年次有給休暇とその1日取得により習得できるWLB年次特別有給休暇が新設され、2時間単位で取得できる0.25年次有給休暇も開始しました。

このような取り組みを行うなかで、子育て応援宣言企業として独自性及び先進性のある活動を宣言し、その実現に向けて積極的に取り組み優れた成果を上げたことにより、平成25年2月に「おかやま子育て応援宣言企業岡山県知事賞」を受賞しています。

平成25年4月には、配偶者出産休暇の拡大（2日）・子の一歳の誕生日休暇（1日）を整備して、



休暇の取得促進を図っています。平成26年9月からは、女性医師のための「メディカルカフェ」を開催し、子育て先輩女性医師による講演等を年2回程度行って好評を得ています。

平成27年8月からの第4次事業計画では、WLBワーキングに医師部門を加えて更なる活性化を図ることとしています。また、平成27年11月には、第3次事業計画までの目標を達成し、基準に適合したとして厚生労働大臣より「くるみん」の認定を受けました。なお、引き続き、女性活躍推進法に基づき、女性が更なる活動ができるよう労働環境整備を行うために、平成28年4月からは5年計画として、有給休暇取得率の30%以上を目標に、各施設・各職場で推進しています。

当院には現在149名の常勤医師のうち女性医師は28名、更に小学校入学前の子育て中の女性医師は6名います。女性医師本人の希望と在籍診療科の配慮により、短時間勤務（日数・時間数）も可能です。院内保育所も利用できます。

子育てが一段落するまで当直や拘束も免除されています。

以前は産休を期に退職される女性医師がほとんどでしたが、川崎学園では上記のとおり各種制度を整備していったため、育児休業を取得後に復帰される方が多くなり、専門医取得等キャリアアップを目指す女性医師も数多くいます。また、旧姓使用希望についても届出すれば承認されますので、継続勤務し易い環境になっています。

女性医師に限らず、子育て支援についての理解と協力の土壌ができていることが職員の満足度向上となり、「チーム医療」を実践している患者さんへの対応にも繋がるものと思います。妊娠中及び子育てを行う職員の仕事と家庭の両立を支援するための雇用環境の整備や、働き方の見直しに資する多様な労働条件の整備やその他の次世代育成支援対策についても、更なる改善に努めてまいります。



認知症を知ろう

認知症には、早めの予防と正しい対処を！

日時 平成30年
3月11日(日)

受付開始 12:45～
開演 13:30～15:30

会場 岡山県医師会館
三木記念ホール

申込締め切り
平成30年
2月28日(水)

参加費無料
先着300名様
(事前予約制)

1. 認知症になっても大丈夫 (13:35～14:35)

慈圭病院 副院長
岡山県認知症疾患医療センター 石津 秀樹 先生

2. 体幹をつくろう (14:35～14:55)

岡山県医師会 理事/神崎皮膚科 院長 神崎 寛子 先生

3. お役立ち情報 (14:55～15:25)

岡山県医師会 コーディネーター 森 貴美 氏

主催:(公社)岡山県医師会 企画:(公社)岡山県医師会女医部会

お申し込み

代表者および同行者(3名まで)の計4名までのグループは、代表者がまとめてお申し込みください。

記載事項 代表者…氏名、ふりがな、電話番号、
FAX番号、メールアドレス
同行者(3名まで)…氏名、ふりがな

①FAX▶ FAX 086-251-6622

(申込書は岡山県医師会ホームページよりダウンロードしてご利用ください。URL <http://www.okayama.med.or.jp/>)

②Eメール▶ k20180311@po.okayama.med.or.jp

③往復はがき▶

〒700-0024 岡山市北区駅元町19-2

(公社)岡山県医師会

女性の健康週間 県民公開講座 係

(参加者氏名、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上、お申し込みください。)

※事前に代表者の方へ入場整理券をメールで送付いたしますので、印刷したものを又はスマホ画面を当日受付でご提示ください。入場整理券を受信できるアドレスの無い方は、FAXで返信いたします。また、往復はがきでお申し込みの方は、ハガキを返送いたします。

お問い合わせ先

公益社団法人岡山県医師会

女性の健康週間 県民公開講座 係

TEL 086-250-5111

編集後記

寒冷も増し、インフルエンザの流行も本格的となり、医師会の先生方はお忙しく診療されていることとお察しいたします。

今回の会報を作成するにあたり、関わっていただいた皆様に心から感謝いたします。

女性医師支援に取り組むに当たり、「医学生や研修医はキャリアやライフプランについてどんなことに悩んでいるのか率直に聞きたい!」と思い、新しい試みとして、女性医学生、研修医と先輩医師との座談会を今回企画しました。皆さん初対面同士で最初は緊張されていましたが、徐々に打ち解けて女子トークに花が咲きました。医学生と研修医は先輩医師の経験談に熱心に耳を傾けていました。皆さんプロ意識が高く、将来のキャリアについて堅実に考えているのが印象的でした。一番盛り上がったのは出産のタイミング。研修医の時、専門医を修得する前、修得後など、そ

れぞれのメリットとデメリットの話で盛り上がりました。その時の置かれた状況によって異なるため答えは出せませんが、医学生や研修医が最も不安に感じている点の一つだと実感しました。また、「キャリアやライフイベントについてもっと情報がほしい」という声も多く、今回のように、学生や研修医が先輩医師と気軽に話せる場を設けて、リアルな情報を得ることが不安の解消につながるのではないかと思います。女性だけの問題ではないので、男性学生や男性研修医も一緒にワークライフバランスについて本音で語り合える機会があれば…とも考えます。今回医学生や研修医の先生方からいただいた貴重な意見を今後の女医部会の活動に反映していきたいと思えます。

私の住む新見では、朝の気温がマイナスになる日が続き、雪も降っています。寒さが身にしみますが、皆様くれぐれもご自愛ください。

平成30年1月23日 溝尾妙子